

否定構文における否定副詞の考察

丁 允 英

1. はじめに

否定表現を伴う副詞(以下「否定副詞」¹とする)に対する研究は、これまでも様々な観点と方法によって行われ、それなりの成果を上げてきた。その内容は、否定副詞の分布上の現象を統語的、または意味的な観点から考察し、否定副詞がどのような環境に現れるのか、また、否定副詞をどのように類型化できるのか、といった点に集中してきたといえる。副詞の統語的現象つまり共起制限は語彙的な要素のみならず、統語的要素も関わり複雑であるが、共起制限を引き起こす要因については十分に説明されることが少なかったと思われる。

そこで、本稿では否定表現に現れる「否定副詞」の構文論的及び意味論的問題について考察し、どのような「共起制限」を持ち、その要因が何かについて明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

否定表現を塚原(1990)の分類に従って考察を進めていく。塚原(1990)は、否定表現には「文法的否定表現」と「語彙的否定表現」の二種があり、前者は「否定形式の構文で表現する否定表現」、後者は「否定語彙—否定判断で表現する語彙による否定表現」と定義している。

本稿では、「文法的否定表現」の共起制限と「語彙的否定表現」の共起制限とに二分して検討していく。²文法的な否定表現は、動詞、形容詞、名詞+「だ」に打消しの「ない」が付いた形式で示される。形態論的には、助動詞の「ない」(動詞未然形に接続)と形容詞の「ない」(形容詞などの連用形に接続)に分けられる。「語彙的否定表現」は、非存在を表す形容詞の「ない」、対応する肯定形式が存在せず、否定の意味がない派生形容詞とみなすべき述語³などを含む語である。⁴

「文法的否定表現」については、本田(1981a: 67)の4分類に抛り進めていくことにする。以下にその4分類と例を挙げておく。

- (A) $\left\{ \begin{array}{l} \text{名詞} \\ \sim\text{ということ} \end{array} \right\} + \left\{ \begin{array}{l} \text{が} \\ \text{は} \\ \text{も} \end{array} \right\} + \text{ない}$
- (B) 形容詞+ない
- (C) $\left\{ \begin{array}{l} \text{形容動詞} \\ \text{名詞} \\ \sim(\text{という})\text{こと} \\ \sim(\text{という})\text{わけ} \end{array} \right\} + \text{で} + \left\{ \begin{array}{l} \text{は} \\ \text{も} \end{array} \right\} + \text{ない}$
- (D) 動詞+ない

A : (1)貯金がない。 (本田1981a: 67)

(2)私があなただを嫌いになるということはない。 (本田1981a: 67)

B : (3)今日は暑くない。 (作例)

C : (4)あの先生は温厚ではない。

(本田1981a : 67)

(5)役所と市民の連携で計画を作るという
ことではない。 (作例)

(6)彼は心理学者ではない。

(本田1981a : 67)

D : (7)ここでは雪は降らない。

(本田1981a : 67)

川端 (1984) では、否定副詞として「ゆめ/少しも/ちっとも/一向/さっぱり/けっして/毛頭/とうてい/全然/とんと/なかなか/ろくに/めったに/ほとんど」など32語を挙げている。また、小川 (1984) は現代語と古語に分けて「決して/必ずしも/少しも/とうてい/いっこう(に)/ろくに/ちっとも/めったに/さほど/たいして/全然/さっぱり/あまり」など13語を現代語の否定副詞としている。この両者の中から、収集した用例が500例を越える語を選び、「決して/とうてい/全然/少しも/一向に/さっぱり/なかなか/あまり」の8語を考察対象とした。また、このうち「なかなか/全然/さっぱり/あまり」などは肯定表現とも共起するが、否定表現と共起している場合のみを対象とした。

対象とする副詞の用例には、先行研究、朝日新聞、小説及びシナリオ・対談集などを資料に用いた。資料から収集した事例を土台にする研究の長所は個人の直観や言語能力を土台にした例文ではなく、実際の確実な使用例が確保できるということである。このような資料からの事例から特定の語の多様な使用環境を見ることができる。これに反して欠点は、資料から収集した事例であるために非文を見つけないところにある。すなわち、任意の語が統語的あるいは意味的な制約を受ける場合は、

事例に依存できない。そのため、人為的に非文を作らなければならない。しかし、人為的な非文というのは、多数の実例より、信頼度が落ちる。従って、統語的分布を考察するにあたってこの欠点を補う方法は、資料に現れた任意の語に対するすべての統語的環境を調査する必要がある。本稿で取り上げる非文は、主に先行研究から引用した。⁵

3. 分析

3.1 「決して」

「決して」は、話し手が自分の発話を通じて記述している事件・状況がある前提があっても発生しないこと (発生しなかったこと)、あるいはそのようにはしないことを強い意志・判断とともに表すことで、否定の意味を強調する。「決して」は基本的に、ある否定的な前提を踏まえつつ、さらにあえてそれを強く打ち消すという意味があり、前提の考えられない単なる打消しにはあまり使われない。例(8)は、世界各国で生れ変りを暗示するような現象が発表されているという前提があっても、話し手の人間の生れ変りがあるという発話内容に対する断固たる態度を表すことで否定の意味を強調している。

(8)したがって現在まで我々は人間の「生れ変り」があるとは決して断定は致しません。現在まで「生れ変り」を暗示するような現象が世界各国にあると発表しているのです。 (深)

まず、本田 (1981a) は「決して」が、否定構文(A)の「名詞+が/は+ない」の構文とは共起することはないが、「～(ような)こと+は+ない」構文とは相性がよいと指摘しながら、「[名詞+が/は+ない] は、話し手の否定的断定

を表わすものではないということの意味する。この点は「無い」が「有る」の否定ではなく、それ自体「少い、足りない」と同じく形容詞であり、「無」という事態を話手の判断としていわば「肯定的」に表現するものと考えれば十分うなづけるものと思われる。(本田1981b: (13))のように述べている。

(9) 黒人にチップをはらった記憶が全然{少しも/*決して}ない。(恋愛)

本稿でも本田(1981b)の指摘のように、形容詞「ない」は、否定的な意味を持ちながら、「有る」と同じ「肯定的」に表現するものと考ええる。例(9)の「ない」は、「有る」の否定ではなく、非存在を表す語で、「嬉しい・高い・多い」のような形容詞である。国立国語研究所(1972)は、「形容詞は、感動詞・陳述副詞・接続詞やある種の助詞・助動詞のように話し手の主体的なものを直接に表現する語類ではない。名詞、動詞などととも、客体的なことからあらわす側の語類である。形容詞はものごとの性質や状態を表す語類だと言われる。性質や状態というものは人間の主観からはかなり独立的な客観的なものも考えることができよう。そして、形容詞の中には、ある程度客観的だといえるような性質や状態を表わすものも存在していると考えられる(p176)」としている。「全然/少しも」は程度性を含む副詞で、「決して」は「そういう考え方をしないでほしい」という相手の意志や考えの否定を表し、話し手の強い意志や判断を含むものである。従って、「私は～ないと思う」という確信を持って否定的な断定を下そうとするとき、「決して」とは共起できないが、「全然/少しも」の方は、程度性を表すため、形容詞の性質から考えると共起可能で

ある。

(10) この先、どれだけ生きてって、こんなに美しく、怖いものを見ることは決してないだろう。(小説00)

(11a) 偉大なる世論というものがあります。

当局は決して独走はいたしません。(鴉)

(11b) 偉大なる世論というものがあります。

当局は決して独走することはいたしません。

しかし、例(10)のように「～ことはない」構文になると「～することは決してない」というある事態の成立に対する否定的判断を下すことが明らかである。すなわち、非存在を表す表現ではなく事態の不成立に対する主張に変わり、そこには判断作用が必要であるため、「決して」との共起が可能になると思われる。例(11a)と例(11b)についても同様の説明ができる。例(11a)は、否定構文(A)であるが、「決して」が共起しているが、例(11a)は例(11b)のように変えることができ、表す意味もほとんど変わらない。本田(1981a)では、否定構文(A)の「名詞+が/は+ない」の構文で「決して」は共起できないとなっているが、否定構文(A)を論じる場合、「名詞」の性格により共起可能かどうかに分かれるように思われる。「名詞」の性格についての記述は今後の課題としたい。

次に、本田(1981a, 1981b)述べているように「わかる、できる、聞こえる」などは「に」格を取る動詞であるが、「に」格に話し手自身が来る場合、これらの動詞の否定形と「決して」とは共起しない。

(12) * 関西の女は何を考えているんだか、僕には決してわからない。(本田1981a:70)

(13) 関西の女は何を考えているんだか、君

達には決してわからない。(本田1981a:70)

(14a) *この仕事は僕には決してできない。

(本田1981a:71)⁶

(14b)この仕事は僕には絶対(に)できない。

(15)この仕事はあいつには決してできない。

(本田1981a:71)

本田(1981b)では、例(12)、例(14a)が許容されない文である理由を「わからない、できない、聞こえない」のような表現は話し手が、話し手自身のこととして断定するときには使われないからだとしか述べられていない。

「決して」は、話し手の発話内容に対する否定的意志、または否定的な判断を表す。「わかる、聞こえる、できる」などは無意志的な状態の変化を表し、自発性がある。例(12)が非文になるのは、「分かる」の否定形である「わからない」が非意志的な状態の変化を表し自発性があり、認識や理解の否定(不能)を表す語であるため、話し手の否定的な意志を表したり、話し手の判断を表したりする「決して」とはなじまないことによる。同様のことが例(14a)についてもいえる。「できる」も無意志的な語で、否定形である「できない」も、遂行者の能力がある事件・状況を成立させるために必要な能力に及ばない場合と、その事件・状況を成り立たせるのに遂行者の能力は十分だが、条件つまり状況や都合などのために遂行することができないことを表し、話し手の意志とは無関係である。これは例(14a)の「決して」の代わりに単に強める意味の「絶対(に)」(例14b)を入れると非文にならないことから分かる。例(13)と例(15)が非文にならないのは、これらが話し手以外の場合についての発話内容で、話し手の否定的意志や、否定的な判断を下すことができるた

めである。

また、本田(1981a, 1981b)は「かまわない/差し支えない」とも「決して」は共起することができないとし、「かまわない」が話し手の事態に対する態度は、肯定的であるため、否定的断定を強調する「決して」と相容れないと説明している。これに、もう少し付け加えると、「かまわない」は「構う」の否定形で、構文的には否定文であるが、否定の意味が希薄になった語である。実際は「平気、大丈夫」などを意味し、話し手の事態に対する肯定的な態度を表す。そのため、確信をもって否定的な意志や判断を表す「決して」とは共起できない。例(16)を確信を持って強く主張する「決して」の代りに、「全然/少しも」のような程度の意味を持つ否定副詞を入れると共起可能となる。

(16)答えたくなければ答えなくても*決して{少しも/全然}かまわない。⁷

(本田1981b:(7))

3.2 「とうてい」

「とうてい」は、話し手が述べる状況や事件などを遂行する者の能力に対して言及し、その事件・状況の遂行が、遂行者ができる能力の外にあること、つまり、遂行する者の心理、能力、あるいは状況に、ある事態が実現される<可能性がないこと・無理であること>を表すことで否定の内容を強調する。また、不可能であることに対する無力感や慨嘆の強調を示す。例えば(17)は「危機的な状況に追い込まれている」状況からは、「健全な森林の育成、整備」が完全に不可能であることを表している。

(17)国土の約70%を占める我が国の森林地域は、過疎と高齢化の影響で危機的状況

に追い込まれている。この状況から速やかに抜け出さない限り、健全な森林の育成、整備はとうてい不可能である。

(朝：03.2.3.朝刊)

本田(1981a)が指摘したように、「とうてい」は、否定構文(B)の「形容詞+ない」構文で共起可能な場合とそうでない場合とがある。

(18)*このおもちゃはとうてい安くはない。

(本田1981a:78)

(19)このおもちゃは、とうてい子供の小づかいで買えるほど安くはない。

(本田1981a:78)

(20)このおもちゃはとうてい安いとは言えない。(作例)

形容詞はものごとの属性や状態を表す語で、属性とはそのものにすでに備えている固有の性質を表す。つまり例(18)の「安い」は、「おもちゃ」がすでに備えている固有の性質であり、「安くはない」は、現実^に起きた状態を表す。従って、「ある事態が実現される可能性がないこと・無理であること」という判断はありえないため、「とうてい」は共起できない。これは例(18)を、例(20)のように、「言う」の不可能表現に変えると共起可能になることから確認できる。

3.3 「少しも」

「少しも」は、「ほんのわずかだって」の意味で、数量、程度概念を伴う事態に限って使われる。否定を表す語と使われるが否定の強調意識はない。全面的な否定を表し、分布上一番制約が少ない副詞である。

(21)少しも{あまり/全然}寒くない。

(基礎日本語辞典：886)

例(21)は、「寒くない」に対する程度の差が感じられる。これは各否定副詞が「寒くない」に量的な程度の意味的な影響を与えていることである。すなわち「少しの程度それさえも」という量的程度の意味を持ち、全面的な否定をしているということである。ただし、例(22)のように数えられる名詞が来る場合、「少しも」は使えず、「一本も」「一冊も」などが使える。数えられる名詞の場合、数量か程度の概念を伴う「少しも」よりは、明確な数量を表す表現の提示が必要である。数えられる場合、「少しも」が使えないのは、量あるいは程度の暗示がある「少しも」よりは、「一本も」「一度も」のような明確な数量を提示する表現が非存在の状態を明確に表すことができるためである。例(22)で「全然」が使えるのは、「完全でない状態である」ことを表すため、非文とならない。

(22)ムシ歯が一本も{*少しも/全然}ないでしょう。(新潮：ブンとファン)

経験を表す表現「～したことがない」構文にも、「少しも」は使えない。経験そのものには、数量や程度の意味はなく頻度を明確に表す「一回も」「一度も」が使えると、本田(1981a)は述べている。

(23)信長という男は、その生涯、出陣の号令をくださったことが一度も{*少しも}なかった。(新潮：国盗り物)

本田(1981a)は、「埒があかない」という「～ない」の形でしか使われない表現は「少しも」との共起制限について触れているが、⁸どうして共起制限を持つかについては言及がない。「埒があかない」は「決着がつかない」という意味で、「決着がついたかどうか」の二者択一の状況を表し、数量や程度を表すものではない。

ここで「少しも」を、例(24)、例(25)、例(26)のように「一向に/なかなか/全然」の場合は、成立するのを見ても全面的な否定の意味を表すためには中途半端な程度や量を表す語とは使えない。『現代副詞用法辞典』でも例(26)を挙げながら、「少しも」は「ほんの少しの量(程度)もという量や程度の暗示があるので、肯定か否定かの二者択一で途中段階の考えられないものについては用いない。(p206)」と指摘している。

(24) 七人の客は、いたずらに溜息をつき、
もじもじしているばかりで、いっこうに
{?少しも} 埒があかない。

(太宰治：貧の意地)

(25) 「結局は神津さんを通してはこの
話はなかなか{*少しも} 埒があかないと
思うの。わたしあそこの社長を知ってま
すから、直接会って来て上げましょうか」

(新潮：射程)

(26) ×この信号はさっきから少しも青にな
らない。

この信号はさっきから全然(ちっとも)青
にならない。(現代副詞用法辞典：206)

3.4 「全然」

「全然」は、話し手の考えや判断の中の肯定的な価値や一般常識による客観的な基準が、実際の事件や状況と相反することを表し、自分の主張や論の展開に説得性をもたせる。また、ある事態が一切起きない、あるいは起こることがないという、行為の停止、能力の不能を表すこともある。(27)は、規制法違反で秘書らが逮捕された事件に関する例である。常識では秘書から何らかの報告を聞いて知っているはずである

が、報告もなく何も聞いていない、また、そのため自分は無関係であることを主張している。つまり、一般的な常識と実際の事件や状況と相反することを表す例である。

(27) 「(金の授受は?) 聞いてねえんだよ」
疾走した後、最後に言った。

「(秘書からは) 全然聞いていなかった」
(朝：03.3.5.朝刊)

まず、「全然」は、例(28)のように「名詞+ではない」構文では共起しにくいと思われる。「名詞+ではない」構文はある事象自体に対する否定的な断定であるため、その対象の動作あるいは状態が成立しないという「全然」の意味とはなじまない。また、「学生」ということばの性質としては、確定的あるいは断定的なもので、相対的に他と比較あるいは評価することができないという点が挙げられる。例(29)が非文にならないのは、どの程度学生らしいかという相対的な評価が可能であるためである。また、性質あるいは状態を表す形容詞構文に変わって「全然」との共起が可能になる。

(28) *彼は全然学生ではない。(作例)

(29) 全然学生らしくない。(作例)

3.5 「一向に」

「一向に」は、「時間や手間をかけても全然」(森田1989：504)の意味で、事態が違う段階に移行するのを前提にしている、否定の述語と共起することによって他の段階に移行できない状況を表す。期待される他の事態に全く移行されないのに対する不安や困惑を表現する。そして「この映画は一向に面白くない」、「いくら脅かしても一向に効き目がない」、「一向に驚かない」など「さっぱり/ちっとも/全然」と同様、否

定を強調する。つまり、ひたすら一方向だけで進行されて、他の方向へ移行が実現しないという状況を現わす。また、「一向に平気だ」のように肯定形にも係るが、概念としては否定的なものを表す。

(30)この映画は一向に{全然/少しも}面白くない。 (基礎日本語辞典:504)

(31)この映画は面白くない。 (作例)

(32)この映画は一向に面白くならない。 (作例)

例(31)「この映画は面白くない」という例は「面白くない」という事態に対する断定的な表現であるのに対し、例(30)のように「一向」を入れることで期待される他の事態に移行されないことに対して困る様子が現れる。しかし、例(30)は期待される他の事態への移行に対して困る様子ではなく、単に「この映画」は「面白くない」という事態の強調を表しているとも解釈できる。この場合の「一向に」は、「全然/少しも」と置き換えが可能である。事態に対する断定的な表現は瞬時的なもので、時間の幅をもたないが、期待される他の事態への移行というのは時間的な幅があり、継続性を持つ。つまり、例(30)の「面白くない」という事態に対する瞬時的な否定の断定表現だが、例(32)の「面白くならない」という時間の幅のある表現に変えると「一向に」の意味が次のような肯定形の場合にも成立可能であろう。

(33)どんなに悪く言われてもぼくはいっこうに平気だ。 (現代副詞用法辞典:54)

例(33)では、「気にしない」という意味の「平気」であって、否定の内容を含んでいる。「一向に」が入ることによって、何か刺激があることを望んだにも関わらず、全然平気である

というニュアンスになる。これは「一向に」が「平気だ」の内容の量を増加させているためであろう。

本田(1981a)は「一向に」の分布上の特色として、「～では+ない」の否定構文Cで名詞が来る場合と、「文+わけ/こと/の」が来る場合は「一向に」が現れにくいということを挙げている。

(34)*彼は心理学者では一向にない。 (本田1981a:72)

(35)*彼はいつも在宅しているわけでは一向にない。 (本田1981a:72)

(36)*役所と市民の連携で計画を作るということでは一向にない。 (作例)

(37)*その金で生計を立てようなどと企んでいるのでは一向にないのです。 (本田1981a:72)

「一向に」は事態の他の段階への移行を前提にした発想である。従って否定が来ると他の段階へと変わらない状況を表す。しかし、「名詞ではない」、「～わけ(こと/の)ではない」構文は、話し手によって事態に対する論理的な思考の産物としての否定的断定を表す表現である。つまり、否定的な断定そのものは瞬時的なもので、他の方向に移行を願うという時間の幅のある「一向に」は意味的な影響を与えることができない。

(38)雪道をたどりながら、送りとどけた娘へのおもいがつのも、一向に不自然ではない。 (文学00)

ここで例(38)のように「形容動詞+ではない」構文が、「名詞+ではない」構文とは違って、共起可能な理由は形容動詞が物事の性質または状態を表すもので、違う事態への移行を期待す

ることが出来るためであると思われる。

3.6 「さっぱり」

「さっぱり」は、事態や状態が現われない場合や、記憶、理解などができない場合、または本人がその事物、状態の出現を希望して、期待しているにもかかわらず期待する成果が実現できない(あるいは、実現しない)場合の気持ちを表す。例(39)は、いくら理解しようと努力をしても、期待する成果つまり状況を把握することができない場合の気持ちを表す。つまり、「わかる」という事態が全然出現しない状態である。

- (39)大筋がなくなって、数字に弱いという細部だけが残った。最悪だよ。何がどうなっているのか、僕にはさっぱりわからない。事務所の税理士が僕に細かく説明してくれる。でも面倒でとても理解できない。(ダンス)

本田(1981a)では「さっぱり」は、否定構文C「～では+ない」とは共起しないと述べられている。また、本田(1981b)は「～では+ない」の構文について、話し手のある事態に対する否定的な判断を表すもので、この構文の意味は「決して」が現れることによって顕在化するものとしている。従って、単に話し手のある事態に対する否定的な判断を表す「～では+ない」の構文で、期待する事態の出現を願う気持ちを表す「さっぱり」が、共起不可能なことも説明できる。

- (40)*そのこと自体はさっぱり不思議ではない。(本田1981a:73)
 (41)*彼はさっぱり心理学者ではない。(本田1981a:73)

- (42)*そんな危険があるというわけではさっぱりない。(本田1981a:73)

また、「かまわない」「さしつかえない」とも共起できない。⁹これもまた「さっぱり」の意味的な特性と関係があると思われる。「かまわない」「さしつかえない」は、「～しても関係ない」「気にしない」「不都合ではない」という許容の意味がある。このように状況を受け入れる(許可する)態度と、「さっぱり」のような違う事態の出現を希望する気持ちを表すものとは相容れないため、共起することができない。

- (43)*ホントはもっと、勝手なことされても、ひどいことされてもさっぱりかまわない。(作例)
 (44)*自由な諸個人が自発的に集団を作り、地方を創り、国家を造り、世界を製る、これが「自治」の思想だといって{さっぱり}さしつかえない。(論点97)
 (45)*我々甲羅をへた独身ものは、ここへ来ても、{さっぱり}さしつかえない。(新潮:はつ恋)

3.7 「なかなか」

否定副詞「なかなか」は、物事の質や量などの程度が予想を上回ると話し手が判断した場合に使い、程度の大きさに対する話し手の評価を表わす。長い時間が経ったが、思った程度にまだ達していない、それがすぐには実現できないことを表す。(46)は、すぐにでも「有香を探せる」と思っていたのに、実際はその状態が予想を上回ったと評価をしている例である。(47a)の「～にくい」は接尾語的に使われていて、そうすることが難しいということを表す。話し手によって「困難」の程度が、予想を上回ると認

識されている。この場合、(47b)のように動詞の否定形と言い換え可能である。

(46)「今、大東京テレビの保阪さんからお電話を戴いたのですが、有香を探してくださると聞きました」

「はあ、そうしたいと思っています」

「ありがとうございます。本当に助かります。もう一人子供がおりますし、森脇も私も仕事があります。東京にいて、なかなか思うようにならないものですから、本当に助かります。」 (柔らかな類)

(47a)結局自分で乗り越えるしかない、というふうになかなかならないのです、だって、責任はみんなにあるわけだから「わたしの不幸をなんとかしてちょうだい」という格好になるから、なかなか治りにくいのですね。 (河村)

(47b)結局自分で乗り越えるしかない、というふうになかなかならないのです、だって、責任はみんなにあるわけだから「わたしの不幸をなんとかしてちょうだい」という格好になるから、なかなか治らないのですね。

本田 (1981a) は、否定構文 B「形容詞＋ない」、否定構文 C「形容動詞＋ではない」とは共起可能な場合とそうでない場合とがあり、否定構文 D「動詞＋ていない」では、共起することができないと指摘している。

まず、否定構文 B「形容詞＋ない」、否定構文 C「形容動詞＋ではない」の場合、例(48)、例(49)が非文になるのは、形容詞・形容動詞が「はじめから実現している状態」(森田1989: 838)の語であるために、これから実現を願う「なかなか」となじめないためと思われる。本

田 (1981a) では、これらの構文と「なかなか」が共起する場合は、「まずくない/悪くない」、「容易ではない/楽ではない/不細工ではない」などがあるくらいで、一般的にはこれらの構文と「なかなか」とは共起しないとしている。

(48) *なかなかよくない。(森田1989: 838)

(49) *彼はなかなか親切ではない。(作例)

次に、否定構文 D「動詞＋ていない」についてみると、「動詞＋ている」は、進行中の動作を表す用法ではなく、主体の状態を述べる用法である。「動詞＋ていない」という構文は、動作の不遂行状態の表現で実現を願う意図はない。つまり、予想した程度に達することを期待する「なかなか」とは共起できない。例(50)が非文になるのはそのためである。

(50) *最近はなかなか芝居を見ていない。

(本田1981a: 81)

3.8 「あまり」

「あまり」は、状態や能力、程度・頻度が平均や基準に達していないこと、つまり予想よりも低いことを表す。例(51)は積極的に「機嫌が悪い」というほど悪くはないが、「良い」というプラス評価もできないということを表わす。

(51)彼の貯金残高が私の四分の一だとはとうてい思えないが、このところ機嫌があまりよくない。(小説96)

本田 (1981a) では、「～では＋ない」タイプで「～」部分に「文＋わけ/こと/の」が来た場合、「あまり」は生じないとしている。「～わけ/こと/の＋ではない」構文は、ある事態・事柄に対する話し手の否定的な断定を表す。否定的な認識で終わるために程度の意味を持つ「あまり」が入ると非文になる。同様の理由で

「～はずがない」構文でも「あまり」は許容されない(例(53))。例(54)の「ない」は頻度に対する非存在を表しているため「あまり」が共起できる。

(52) *議題が少ないからといって、会議が早く終わるということではあまりない。
(本田1981a: 86)

(53) *あまり大きいはずがない。(作例)

(54) 理一は大船の工場に出むいたことはあまりない。年に一度訪ねればよい方であった。
(新潮: 冬の旅)

次に、程度性を表さない「形容詞類+ではない」構文では共起できないと思われる。「あまり」は、形容詞の表す状態に程度性が付加される要素を有している必要がある。例(55)は極限の状態を表していて、程度性の序列になじまないために非文になるのである。つまり、程度性を考えられない二者択一の状態では使えない。「同じ」について説明すると、「違う」「似ている」などの属性には「かなり違う」「すこし違う」「やや似ている」「非常に似ている」のような程度性があるが、「同じ」という極限に達すると、「すこし同じ」「もっと同じ」などという程度の限定はありえなくなる。¹⁰

(55) *あまり{同じ/いっぱい/真っ暗}¹¹ではない。(作例)

また、(56)は不足を表している例で、「時間、米」のように不特定多数の数量になる場合、「あまり」は共起できるが、「耳」のように特定可能な場合共起不可能となる。

(56) {時間/米/*耳}があまりない。(作例)

4. おわりに

「否定副詞」の共起制限は統語的な要素のみ

ならず、語彙的要素も関わるため複雑である。そこで本稿では、「否定副詞」が現れる文を文法的な否定表現と語彙的な否定表現とに分け、それぞれにおける共起制限とそれを引き起こす要因について考察を行った。

まず、文法的な否定表現との関わりを考察するために、本田(1981a)が提示した4つの否定構文を中心に共起制限を検証した。否定構文(A)「名詞+が/ない」では、「決して」が共起制限を持つ。それは、「ない」は、ある動作あるいはある状態が全体としては存在しないことを意味するため、「決して」のようなある事態に対する否定的な判断を下そうとする語とは共起しにくい。

次に否定構文(B)「形容詞+ない」で共起制限を持つのは「とうてい/なかなか」である。形容詞ははじめから実現している状態を表すため、「非現実のある点に到達することに対して不可能である」という判断を表す「とうてい」とは共起できない。また、「これから実現を願う」という意味を表す「なかなか」ともなじめない。

さらに、否定構文(C)「名詞+ではない」では、「全然/一向に/さっぱり」が共起制限を持つ。「名詞+ではない」構文は、ある事態に対する認識において否定的な判断を表す。対象(名詞)が、断定的あるいは確定的なもので、相対的に他と比較あるいは評価することができない語である場合、その対象の動作あるいは状態が全く成立しないということを表すのが難しい。対象の動作あるいは状態が成立しないという「全然」とは共起できない。また、他の方向に移行を願うという時間の幅のある「一向に」と、瞬時的な断定を表す「名詞+ではない」構文とは共起できない。また、「さっぱり」は、期待される

異なる事態の出現を希望する気持ちを表すため、ただ話し手の事態に対する否定的な断定を表す構文では現れない。

次に否定構文(C)「形容動詞+ではない」では、「なかなか/さっぱり」が共起制限を持っている。「～ではない」構文は、話し手のある事態に対する否定的な判断を表すものである。そのため、これから実現を願う「なかなか」とはなじめない。「さっぱり」がこの構文で共起できない要因は、否定構文(C)「名詞+ではない」と同様、「さっぱり」は、期待される異なる事態の出現を希望する気持ちを表すため、単なる話し手の否定的な判断を表すものとはなじめない。また、「あまり」は程度の意味合いを持つ場合にのみ共起可能になるので、「～わけ(こと/の)ではない」、「～はずがない」のように単なる話し手のある事柄に対する否定的な判断を表す場合や、「程度性を表さない形容動詞+ではない」構文では許容されない。

最後に否定構文(D)「動詞+ていない」では、「なかなか」が共起することができなかった。「動詞+ていない」構文は、動作の不遂行状態を表すもので、「なかなか」ように実現を願う意図はないため共起制限を持つ。その他「～したことがない」のような経験を表す表現は、経験そのものに程度の意味合いを持たないため、「少しも」のように程度の暗示がある副詞との共起制限が見られた。

次に、語彙的な否定表現では、「かまわない/さしつかえない」などと「決して/さっぱり」とは共起できない。「かまわない/さしつかえない」などは、「～しても関係ない、平気、大丈夫」という意味で、否定の意味が希薄になって、事態の変化ではなく、受け入れる態度を表

す語である。そのため、事態に対する否定的な断定を表す「決して」や、期待される事態(異なる事態)の出現を願う「さっぱり」とは共起できない。「同じ/いっぱい/真っ暗」のような程度性を持たない二者択一の場合に「あまり」は共起不可能である。なお、不足を表す「あまり」は、分量や程度を表す不特定多数に限り共起でき、特定多数を表す名詞(耳など)とは共起できない。数えられる名詞と、「埒があかない」という「～ない」形でしか使われない表現と「少しも」とは共起制限が見られた。数えられる名詞の場合は、程度の暗示を伴う「少しも」の代わりに明確な数量を表す表現が必要となる。また「埒があかない/つまらない」などという表現は二者択一で度合いを考えられない表現であるため、数量の暗示のある「少しも」とは共起しにくい。

本稿では8語の「否定副詞」を対象に考察を行ったが、今回用いた文法的な否定表現と語彙的な否定表現との共起制限とその要因についての考察は本稿で取り上げた8語以外の「否定副詞」にも有効と思われる。¹²

なお、今後はコンテキストの中での働きも視野に入れ研究を深めたい。

用例の出典(引用に当たっては括弧内の文字によって示した)

江国香織(2002)『泳ぐのに、安全でも適切でもありません』集英社(泳)

遠藤周作(1993)『恋愛とフランス大学生』『日本の名随筆31留学』株式会社作品社(恋愛)

桐野夏生(1999)『柔らかな頬』講談社(柔らかな頬)

村上春樹(1991)『村上春樹全作品1979～1989』ダンス・ダンス・ダンス』講談社(ダンス)

唯川 恵(2001)『肩ごしの恋人』マガジンハウス(肩)

池端俊策(1999)「あつもの」『シナリオ』99-11、シナリオ作家協会(あ)

池端俊策(1997)「我等の放課後」『池端俊策ベスト・シナ

- リオセクション, 1』三一書房(我)
- 池端俊策(1997)「百年の男」『池端俊策ベスト・シナリオセクション, 1』三一書房(百)
- 犬童一心・斉藤ひろし・塩田明彦(2003)「黄泉がえり」『シナリオ』3, シナリオ作家協会(黄)
- 磯村一路(2004)「解(げ)夏(げ)」『シナリオ』3, シナリオ作家協会(解)
- 遠藤周作(1996)『深い河』株式会社講談社
- 森下直(2003)「13階段」『シナリオ』4, シナリオ作家協会(階段)
- シナリオ作家協会編『'00年鑑代表シナリオ集2000』映人社(年鑑00)
- シナリオ作家協会編『'02年鑑代表シナリオ集2002』映人社(年鑑02)
- 清水邦夫(1992)『鴉よ, おれたちは弾丸をこめる』『清水邦夫全仕事1958~1980(上)』株式会社河出書房新社(鴉)
- 君塚良一(1998)『踊る大捜査線 湾岸警察署事件簿』キネマ旬報社(踊)
- 横谷昌宏(2001)「溺れる魚」『シナリオ』2, シナリオ作家協会(溺)
- 日本エッセイスト・クラブ編『父と母の昔話 '96年版ベストエッセイ集』文藝春秋(父96)
- 日本文藝家協会編(1996)『現代の小説』徳間書店(小説96)
- 日本文藝家協会編(1998)『現代の小説』徳間書店(小説98)
- 日本文藝家協会編(2000)『現代の小説』徳間書店(小説00)
- 日本文藝家協会編(1998)『文学1998』講談社(文学98)
- 日本文藝家協会編(2000)『文学2000』講談社(文学00)
- 文藝春秋編(1996)『日本の論点 '97』株式会社文藝春秋(論点97)
- 河合隼雄・村上春樹(1999)『村上春樹, 河合隼雄に会いにいく』新潮文庫(河村)
- 吉本ばなな(1991)『キッチン』福武書店(吉)
- 新潮100冊 CD-ROM(新:作品名)
- 太宰治 CD-ROM1(太宰治:作品名)
- 太宰治 CD-ROM2(太宰治:作品名)
- 宮沢賢治童話全 CD-ROM(宮沢賢治:作品名)
- 2001年1月1日から2003年3月31日までの朝日新聞, 朝日の週刊誌(朝)

参考文献

- 小川輝夫(1984)「否定誘導表現—陳述副詞の機能再考—」『文教国文学』15号, pp20-39, 広島文教女子大学国文学会
- 川口義一(1982)「副詞の構文論上の位置づけ—文末の否定表現との呼応による検討」『木村宗男先生記念論文集』pp147-163, 早稲田大学語学教育研究所
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』pp176-198, 明治書院
- 工藤真由美(2000)「否定の表現」『時・否定と取り立て』

- pp95-150, 岩波書店
- 国立国語研究所(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 小矢野哲夫(1985)「形容詞のとり格」『日本語学』4-3, pp21-28, 明治書院
- 近藤泰弘(1997)「否定と呼応する副詞について」『日本語文法 体系と方法』pp89-99, ひつじ書房
- 塚原鉄雄(1990)「否定表現雑感」『日本語学』9-12, pp4-9, 明治書院
- 原田登美(1984)「否定との関係による副詞の四分類」『国語学』128, pp(1)138-171, 22, 国語学会
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 本田晶治(1981a)「日本語の否定構文(1) — 「否定副詞」の分布をめぐって(前) —」『研究報告』17-1, pp67-88, 静岡大学教養学部
- (1981b)「日本語の否定構文(1) — 「否定副詞」の分布をめぐって(2) —」『研究報告』17-2, pp(1)23-4-(23)212, 静岡大学教養学部
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 西尾実・水谷静夫・岩淵悦太郎編(2000)『岩波国語辞典第六版』岩波書店
- 丁允英(2005)「文末に否定表現を伴う副詞について」『早稲田日本語研究』13号, pp37-48, 早稲田大学日本語学会

注

- 1 本田(1981:68(169))は, 否定構文において「ない」と何らかの形で共起関係をもつ副詞を「否定副詞」と命名した。
- 2 近藤(1997)は, 日本語の否定表現には「文法的否定」と「語彙的否定」とがあると指摘している。「語彙的否定」については, 「不可能, 不明, だめ」などの語を例に挙げながら, 「文法的には肯定表現であっても, 語彙自体に否定の意味を含む一群の語がある(p96)」と, 説明している。また, 工藤(2000)では, 文法的否定形式は「基本的に〈述語否定=文否定〉であって, 主語と述語とのむすびつき(ネクサス)を否定するもの(p103)」とし, 語彙的否定形式については, 「主語と述語との結びつきを否定するものではない〈語否定〉(p104)」と, 述べている。
- 3 例えば, 「くだらない, つまらない」のような語で, 否定の意味がない派生形容詞とみなさなくてはならないものを指す。詳しくは工藤(2000)のp100~101を参照していただきたい。
- 4 この他に打消しの接頭辞(未, 不, 非, 無, など)を含む語もあるが本稿では省くことにする。
- 5 引用した資料に関しては, 用例末尾の括弧に略語で示した。なお引用の際には, 否定副詞に下線を付した。そして非文(文法的に可能でない文, または文法的に可能であっても実際の発話に用いにくい文)を挙げる際には文頭に「*」印を付す。「?」は非文とするほどではないが, 不自然に感じられるものを指す。括弧

{ }内の副詞は原文に筆者が付け加えたものである。

- 6 本田（1981b）では、例(14a)は実は許容しうる文であるとし、この場合の「できない」は「仕事」を遂行する能力を備えていないことを意味するのではなく、能力はあるけれどその仕事はやらない、といった話し手の拒否的な態度の表明を表すものであると記述している。一方、例(5)には、第三者の拒否的な姿勢を表すことはなく、もっぱら話し手の否定的な判断を表すと述べている。本田（1981b）のこのような記述も可能であるが、本稿では「できる、聞こえる、わからない」などの動詞は、無意志性で統一した説明ができるため、この点については、稿を改めて論じた。
- 7 例(16)は「決して」の代りに、「少しも」と「全然」を用いたら適格な文になる。括弧 { } 内の「少しも」と「全然」は筆者が付け加えたものである。
- 8 話しことばでは「少しも」と「埒があかない」との共起制限が崩れて来ているが、一般的には共起不可能とされる。実際、本稿で用例の収集に用いた作品の中で「埒があかない」は26例あったが、「なかなか」と「一向に」との共起しか見られなかった。
- 9 収集した用例のうち、「かまわない」「さしつかえない」と共起した否定副詞には「一向（に）（11例）」「ちっとも（3例）」「少しも（2例）」が見られた。
- 10 「同じ」についての記述は、国立国語研究所（1982：157）から引用した。
- 11 小矢野（1985：27）で極限の程度を表す形容詞として「抜群だ、最高だ、最低だ、最悪、最善だ」など、接頭語「ま」の付くもの「真っ白だ、真っ黒だ」などを挙げている。
- 12 『岩波国語辞典第六版』（2000）における副詞（的）は、1508語あり、そのうち否定副詞が66語ある。